

R. オドーネルの「スミス価値尺度論」解釈 (IV)

中 川 栄 治*

序

本稿は、前三稿（中川栄治「R. オドーネルの『スミス価値尺度論』解釈」(I), (II), (III)『広島経済大学経済研究論集』第23巻第4号, 2001年3月, 21-38頁, 第24巻第1号, 2001年6月, 21-37頁, 第24巻第2号, 2001年9月, 21-32頁）を受け, Rory O'Donnell, *Adam Smith's Theory of Value and Distribution: A Reappraisal*, Basingstoke & London: Macmillan, 1990 中に示される「アダム・スミスの価値尺度論」に関するオドーネルの所論の内容およびその特徴等を明らかにする試みの最後の部分をなすものである**。

(注)

** なお、本稿中で言及する諸文献のうち前三稿で既出のものについては、その略記は、前三稿でのそれに従う。また、本稿中の見出しの番号および注の番号は、前三稿からの通し番号である。

VIII オドーネルの解釈を振り返って——覚書——

前三稿でみてきたように、オドーネルは、「アダム・スミスの価値尺度論」研究の近年の傾向を、スミスの労働支配力尺度を厚生測定を企図された購買力の一指標とみなし、以前の注釈者たちが多くの注意を払った「支配労働」と「体化労働」との関係、スミスの思想中では重要な役割を演じてはいなかったとして退ける、といったものである、とみるとともに、そのような傾向に対し、価値尺度についての議論におけるスミスの主要関心事は、生産方法の変化によってもたらされる諸商品の価値（交換価値・相対価値としての価値、相対価格）の変化ということであっ

* 広島経済大学経済学部教授

たのであり、そしてそこでのスミスの意図は、生産方法の変化・技術変化の一結果としての諸商品の価値ということを研究するための尺度を見つけ出すということであったという視点に立ちつつ、その議論を展開したのであった。⁽⁷⁸⁾ここでは、そのようなものとしてのオドーネルの議論を振り返りつつ、幾つかの点を指摘、確認しておくこととする。

(1)：オドーネルのその議論は、既存の諸研究を強く意識しつつ独自の解釈を展開しようとするものであったのであるが、スミスの労働支配力尺度を生産方法の変化・技術変化・生産条件の変化・生産の困難性の変化等といった脈絡のなかで捉えようとする発想そのものは、彼に先立つブレイドゥン、さらに、シロスーラビーニの各々の視点ときわめて近いものをもつものであった。すなわち、ブレイドゥンによれば、スミスは事物の「真実価格」を「それを獲得するための苦労と骨折り（不効用）」と定義するのであるがそれは事実上、生産性と表裏の関係にあるもの（そして、概念的には、交換価値としての価値とは別のもの）であったのであり、スミスは事物の「真実価格」の経時的変化の測定ということによって事実上、当該事物の生産における生産性の経時的変化の測定といったことを考えようとしていたのであって、『国富論』第1篇第5章でスミスが労働支配力標準等を論じた際の主要関心事はそのようなものとしての生産性の経時的変化の測定、そのための指標等といったことであった、と捉えられていたのであった。また、シロスーラビーニによれば、スミスは主に、異なった諸時点および諸場所における異なった諸商品の価値に対して技術変化がもたらす諸帰結を分析することに関心を抱いていたのであり、また諸相対価格に対して技術進歩がもたらす諸帰結の研究を意図していたがゆえにスミスは異時点間の比較に使用される標準を必要としたのであって、スミスの議論においては「支配労働」という標準は、そのような「技術変化」の存否およびその程度を反映した形で「価値」（相対価格）の大きさを表示するような価値（相対価格）標準として構想されていた、と捉えられていたのであった。そしてオドーネルは、『国富論』第1篇第5章の初めのほうでスミスが言う「真実価格」を実際には生産性の一尺度と捉えつつ、しかも、労働支配力を価値尺度としようとする価値尺度についての議論におけるスミスの主要関心事そのものは、生産方法の変化によってもたらされる諸商品の相対価値（交換価値としての価値、相対価格）の変化ということであった、とみ、またそこでのスミスの意図は、技術変化の一結果としての諸商品の変化する価値（交換価値・相対価値としての価値、相対価格）ということを研究するための尺度を見つけ出すということであった、とみたわけである。

(2)：ブレイドゥン、シロスーラビーニのうえのような各々の見方そのものは、

「スミス価値尺度論」に関連する諸研究のなかで独自の地位を占める特徴的なものであったのであり、オドーネルはそのような見方にきわめて近い見方をとりつつスミスの議論にアプローチし、そしてシロスーラビーニの場合におけるのと似て、スミスは商品の価値（交換価値・相対価値，相対価格）を労働支配力のタームで表示すれば，その価値の経時的变化は，当該商品の生産における困難性の変化・生産条件の変化・技術変化・生産方法の変化を指し示すことになると考えた，とみたのであるが，オドーネルはまた，一方で，スミスのその価値尺度は資本蓄積の尺度でもあったとして，年々の生産物に体化された労働の量を超える年々の生産物によって支配される労働の量というその差が潜在的蓄積の尺度となるとスミスが考えたとみる解釈を妥当なものとするのであった。しかしまた他方で，スミスは労働支配力という彼の価値尺度を，商品に対する実質購買力を確定するための物価指数に相当するものとして使用しようとし，さらにまたその実質購買力確定をつうじて厚生測定をなそうとしたとみる解釈，あるいはまたスミスのその尺度は産出高の一尺度たることが意図されていたとみる解釈は，誤ったものである，ともするものであった。（なお，例えばシロスーラビーニは，スミスは「支配労働」標準を，付随的にはあるが，一経済の総産出としての「年々の生産物」の大きさおよびその経時的な動きを測定するために用いようとした，とみ，また，オドーネルとは違った形での，スミスの議論における「労働支配力尺度」と蓄積といったことへの言及をなしていたのであった。）

(3)：また，オドーネルは，うえのようなものとしての価値尺度の問題そのものは主に『国富論』第1篇第5章で扱われているとみるとともに，その第5章でのスミスの議論自体は，初めのほうの部分は前資本主義経済に，残りの部分は資本主義経済に関連し，スミスが労働を「商品の交換価値の真の尺度」として定義したのは前者の議論においてであったが，スミスが労働支配力尺度の論理を示したのは後者の議論においてであり，その尺度が実際に適用されたのは資本主義経済にたいしてであった，とするのであった。

(4)：そしてオドーネルは事実上，まず，『国富論』第1篇第5章第1－第7パラグラフを前資本主義経済に関連する議論として捉え，第1－第3パラグラフでは「あらゆる物の真実価格，すなわち，あらゆる物がそれを獲得しようとする人にたいして真に費やさせるものは，それを獲得するための労苦と骨折りでである」という実際上は生産性の一尺度である「真実価格」の定義が採択され，またそこでは，「体化労働」と「支配労働」との両方のことが言われていた——より正確には，この段階では，一商品の生産に費やされた労働（「体化された労働」）の量と一商品が

支配しうる財貨のなかに体化された労働の量とが区別されていなかった——、とするとともに、そのような前資本主義的交換経済においてはそれら二つの労働量は等しくなる、ともし、また、第7パラグラフ中ではスミスは生産を「労働者の観点」からみつつ、労働時間が実際に、生産の困難さの良好な尺度であることを主張し、「等量の労働は、時と場所のいかんを問わず、労働者にとっては等しい価値をもつものと言うことができよう」等々といったことを述べることによって、価値の尺度あるいは諸商品の「真実価格」として労働を選択することを正当化するための不変性ということを指摘しつつ価値尺度としての労働の選択を明言した（また、この段階では「体化労働」と「支配労働」との区別はなされていなかったが、うえのようなことを論じるスミスの諸文言は、生産に費やされる不変な量の労働は不変な量の価値を創造するということを述べているものとして理解することができる）、とするのであった。そしてそのうえでオドーネルは、第8パラグラフ以下の資本主義経済に関連するスミスの議論について、スミスはそこでは「労働者の観点」から「労働を雇う人々の観点」への転換をなし、また、「真実価格」という用語の意味を、労働時間の量によって表現されるものとしての「労苦と骨折り」の量を指すものから、生活資料の量によって表現されるものへと拡張しようとしたのであり、そしてスミスは諸商品と労働の「真実価格」のこの後者の考えを、練り上げ、使用しようとしたのであって、とくに、スミスがすべての他の諸商品の真実価格の尺度として採択したのは労働の真実価格についてのこの考えであった、とするわけであった。

(5)：なお、オドーネル自身も触れているようにスミスの議論における事実上うえのような「労働者の観点」と「労働を雇う人々の観点」あるいはまたうえのような二つの「真実価格」概念といったことに言及する評釈は以前から存在してきたのであり、また事実、そのような点との関連でスミスの議論における一貫性の欠如、矛盾、混乱等々といった指摘をなす評釈が存在してきたのであるが、それに対しオドーネルの場合には、スミスはそのような「労働者の観点」から「労働を雇う人々の観点」への転換を意識的になしたのであり、また、労働時間の量によって表現されるものとしての「労苦と骨折り」の量という「真実価格」概念を放棄して生活資料の量によって表現されるものとしての「真実価格」概念を採ったわけでも、それら両概念の間で混乱していたわけでもなく、むしろスミスは、一群の仮定を設定することによってそれら両概念を矛盾することのないものとして捉えようとしていたのであって、そこでのスミスの議論そのものは論理の一貫した内容をもつものであった、と把握されようとするのであった。（また、事実上「価値の説明（価値の因果的説明）の問題・価値理論の問題」と「価値尺度の問題」とは論理的には別個の

問題と捉えるオドーネルは、多くの以前の評釈者たちがスミスの議論における「支配労働」と「体化労働」との関係に注意を払い、またスミスによる「体化労働」と「支配労働」との混同という解釈がしばしばなされてきたのであるが、スミスは「価値の説明」の脈絡でも「価値尺度」の脈絡でも「体化労働」と「支配労働」とを混同してはいなかった、ともするのであった。

(6)：また、オドーネルは、うえの前資本主義経済に関連する議論でスミスがすべての商品はもともとは「労働によって購買された」と言うときの「購買する」ということは、自然から商品を引き出す際に実際に費やされる労働ということ、また、その各々が等量の労働という価値を含んでいる二つの商品の交換ということ、同じように指していたのであって、そこでは事実上、「労働支配力」とは、「支配しうる商品中に体化された労働」の量を指していたのに対し、資本主義経済に関連するスミスの議論中での「労働支配力」とは、「支配しうる生きた労働」の量を指していたのであり（『国富論』第1篇第5章の初めのほうの諸パラグラフでのスミスの議論に基づきつつその第5章全体（さらに『国富論』全体）における「労働支配力」を当該商品が支配しうる商品のなかに体化された労働の量として捉える解釈は誤り）、そこでの価値尺度としての「労働支配力」は、「生きた労働に対する支配力」としての「労働支配力」であったのである、とするのであった（また、第5章冒頭の三パラグラフでの前資本主義経済についてのスミスの議論においては諸商品は体化された労働に比例して交換されるということから、「そのとき市場にあるすべての労働、またはすべての労働の生産物に対する一定の支配力」としての「購買力」に言及され、そこには、前資本主義経済における「購買力」の一尺度としての「労働支配力」といった考えはみられるが、スミスが第5章のあとのほうで展開しそして『国富論』の様々な箇所で使用した購買しうる生きた労働の量としての「労働支配力」尺度そのものは、スミスの議論からしても商品購買力の一尺度ではありえず、むしろそれは、生産性変化による商品諸相対価格の諸変化を調べるのに使用されるといった形で生産性改善を調べるのに使用されるものとして構想されていたのだ、ともみるわけであった）。

(7)：しかしまた同時にオドーネルは、『国富論』第1篇第5章冒頭の諸パラグラフにおける重要な諸言説のほとんどのものはカンティロン、ハリス、ヒューム、マンドヴィル、ホップズの著作中に見出される諸説の再述であるということからして、スミスは（資本主義的交換の分析のための）彼の新しい価値尺度を、富、労働、交換、価値に関する広く受け入れられていた幾つかの基本的諸説のうえに基礎づけようとしていたと推測しうる、とするとともに、前資本主義的交換および資本主義

的交換の双方における価値尺度についてのスミスの議論中に見出される最も重要な属性は、「支配される労働」と「体化された労働」との結びつき、またそれをもとにした「支配される労働」と価値との結びつき——その結びつきなしには、いかなる支配労働尺度も、大いに用いられることは不可能であった——、ということであった、とみるのであった。そしてオドーネルは、前資本主義的交換の説明（そこでは、（直接的に）諸商品は「体化された労働」に比例して交換されることになる）では労働支配力（支配される財貨のなかに「含有されている」労働という意味での労働支配力）に対する「費やされた労働（労苦と骨折り）」の直接的均等としてその結びつきは容易に確定され、そしてその労働量が「真実価格」、「価値」、「真の値打ち」、「真実の費用」、「最初の代価」、「本源的購買貨幣」、「真の尺度」として定義され（『国富論』第1篇第5章第1－第3パラグラフ）、そこではそのような形で、生産の困難性と労働支配力との間のある結びつきが保たれ、その結果、価値と「支配される労働」との間の矛盾のないある結びつきが据えられえたのであるが、スミスは「体化された労働」と労働支配力との結びつきを、資本主義的交換の議論に持ち込もうとしたのであり、そして、そこではそのような結びつきは簡単には確定できないという事情をうけてスミスは一群の仮定を設定しつつ、その結びつきを確定しようとした、とみるわけであった（また、「スミス価値尺度論」研究の近年の傾向を、スミスの労働支配力尺度を厚生測定を企図された購買力の一指標とみなし、以前の注釈者たちが多くの注意を払った「支配労働」と「体化労働」との関係を、スミスの思想中では重要な役割を演じてはいなかったとして退ける、というものであるとみるオドーネルは、すでに触れたように、スミスの議論に対してしばしばなされてきた「支配労働」と「体化労働」との混同という解釈を否定し、さらにスミスの労働支配力尺度を厚生測定のための購買力の一指標とみる解釈を否定するとともに、スミスの思想中では「支配労働」と「体化労働」との関係はいまみたような脈絡で、重要な役割を演じていたとみるわけでもあった）。（なお、例えばミックは、『国富論』では「支配しうる商品に体化された過去の労働」と「支配しうる現在の労働」のうち後者が真の価値尺度とされていたのであるが、そのような意味での、価値の「真の尺度」としての支配労働という考えは、社会的分業がくまなく行われているあらゆる種類の社会に適用しうることを意図された一般的な形で表現されていたのであり、また、スミスのそこでの議論そのものは、そのようなものとしての、真の価値尺度としての支配労働という考えを、資本主義社会においてだけでなく社会的分業によって特徴づけられるあらゆる種類の社会に妥当するものとして一般化する試みからなっていた——ただし、スミスが価値の「真の尺度」を「支配しうる

商品に体化された過去の労働」よりもむしろ「支配しうる現在の労働」としたことのなかに、スミスの価値理論に関連する諸困難のうちのたいていのものが、その起源をもっていた——、とみていたのであった。それにたいしオドナーは、前資本主義的交換および資本主義的交換の双方でのスミスの価値尺度に見出される最も重要な属性は「支配される労働」と「体化された労働」との比例性ということであったとするとともに、スミスは資本主義経済の分析のために立案されたものとしての彼の労働支配力尺度を、交換経済のすべての形態にあてはまるようにすることを試みていたというよりも、第5章の初めの諸パラグラフから後のほうの諸パラグラフへという形で、前資本主義的交換についての説明から資本主義への一般化を試みていたのだ、とするのであった。

(8)：以上のようにオドナーによれば、スミスが労働を「商品の交換価値の真の尺度」として定義したのは前資本主義経済に関連する議論においてであったが、スミスが労働支配力尺度の論理を示したのは資本主義経済に関連する議論においてであり、またその尺度を実際に適用しようとしたのは資本主義経済にたいしてであった、とみられるとともに、スミスは（資本主義的交換の分析のための）彼の価値尺度を、富、労働、交換、価値に関する当時広く受け入れられていた諸説のうえに基礎づけようとしていたのであり、そして、前資本主義的交換についての議論において「支配される財貨のなかに含有されている労働」という意味での労働支配力と「費やされた労働（労苦と骨折り）」との直接的均等という形で「支配される労働」と「体化された労働」との結びつき・労働支配力と生産の困難性との結びつき・「支配される労働」と価値との結びつきを確定したスミスは、資本主義的交換についての議論においては、そこでの価値尺度としての「生きた労働に対する支配力」という意味での「支配される労働」と、「体化された労働」との結びつきという形で、「支配される労働」と「体化された労働」との結びつき・労働支配力と生産の困難性との結びつきを、確定しようとしたのであり、またその際スミスは、「労働者の観点」から「労働を雇う人々の観点」への意識的な転換をなすとともに、一群の仮定を設定しつつ、労苦と骨折りあるいは生産の困難性の一尺度としての労働時間、そのような労働時間の量によって表現されるものとしての価値と生活資料の量によって表現されるものとしての価値とをほぼ同意義のものにすることによって、「支配される労働」と「体化された労働」との、労働支配力と生産の困難性との、うえのような結びつきを確定しようとしたのだ、とみられるのであった。そしてオドナーは、そこで鍵となっている仮定を、穀物賃金不変（つまり労働者の生活資料である穀物のタームでの賃金不変）という仮定および穀物生産費（つまり穀物1

単位当たり生産費) おおよそ不変という仮定、とみるのであった。

(9) : またその際オドーネルによれば、スミスは穀物賃金不変という仮定から、「遠くへだたった時点では、等量の穀物のほうが、同一の真実価値により近いものをもっている。すなわち、等量の穀物によってその所有者は、他の人々の労働の同一量により近いものを購買または支配することができるであろう」ということを推論し、また、穀物生産費おおよそ不変という仮定についてスミスは『国富論』第1篇第5章中で遠回しの言及しかなしていないが、第11章の「余論」中で「そのうえ改良のあらゆる段階において土壌と気候が同じであれば、等量の穀物の生産には平均的にほぼ同量の労働、同じことであるが、ほぼ等量の労働の価格を必要とするであろう。というのは、耕作が進展しつつある状態での労働生産力の不断の増大は、農業の主要な用具である家畜の価格の不断の増大によって多かれ少なかれ相殺されるからである。それゆえ、我々は、以上すべての理由から、いかなる社会状態、いかなる改良の段階にあっても、等量の穀物は他のいかなる土地の原生産物よりも、いっそうよく等量の労働を代表し、また等量の労働に対応することになるであろうということをおおむね確信してよいだろう。したがってすでに述べたように、穀物は、富と改良のすべての段階において、他のどんな商品、どんな商品群よりも正確な価値の尺度なのである。それだからこそ、我々はあらゆる段階における銀の真の価値は、それを穀物と比較することによってのほうが、他のどんな商品または商品群と比較することによってよりも、よく判断することができるのである」と述べているのであり、その文言は穀物生産費おおよそ不変というスミスの仮定を明示的なものにし、穀物賃金不変の仮定と同様穀物生産費おおよそ不変という仮定もスミスの価値尺度がうち立てられる際の基礎となっているということを示している、とされるのであった。そしてさらにオドーネルによれば、スミスのその文言は、穀物は不変の労働量（「直接」労働プラス「間接」労働という意味での不変の労働量）によって生産される（その意味で、穀物生産費不変）ということをおおむね仮定していたわけではないということを示しているものであり、スミスの労働支配力尺度は、穀物生産におけるおおよそ不変の貨幣費用ということに基づいているのであって、穀物に体化される労働量の不変性ということに基づいているのではない、ともされるのであった。（なお、シロスーラビーニの場合にも、スミスは穀物生産の費用ほぼ一定をおおむね仮定していたとされるのであるが、そこでの費用は、事実上、穀物生産において穀物単位数量当たり直接的あるいは間接的にかかわることになる労働の量のことが考えられており、そしてそのようなものとしての労働の量がほぼ一定という意味で、ほぼ穀物の単位数量当たり費用一定ということが考えられていたのであった。）

(10)：なお、オドーネルは、前資本主義経済に関連する議論から資本主義経済に関連する議論にすすむに際してスミスはうえのような仮定を設定しつつ、資本主義経済に適用されるものとしての労働支配力尺度を論じた、とみるのであるが、オドーネルはまた、資本主義経済での諸価格の決定についてのスミスの見解そのものは賃金、利潤、地代の率が与えられるとき諸価格は生産方法によって決定されるというものであったのであり、さらにスミスはほとんど常に分配の状態を所与として扱い、またその結果、諸価格の諸変化を生産方法の変化に照らして説明した——ただし、スミスは十分に厳密な分配理論を提供しなかったがゆえに、賃金、利潤、地代という「価格の構成部分」についての彼の分析そのものは、価値の特定値を決定できる価値理論とはなっていない——、とみるとともに、資本主義経済に関するスミスの価格体系を一つの生産価格体系と捉え、また、スミスが彼の尺度を使用して資本主義経済での価格変化についての研究へアプローチする際の基本的特徴は、一般に賃金率と利潤率が所与とされているということであったとするのであった。さらに、オドーネルによれば、スミスが実際には特定商品の生産に要する労働投入量と他の投入物投入量との比例的減少（あるいは増加）といったことを念頭に置いているように思えるところで彼はしばしば、その商品の生産に要する労働の量の減少（あるいは増加）という形で言及した、とみられてもいたのであった。

(11)：そして、資本主義経済に関するスミスの価格体系を一つの生産価格体系とみるオドーネルは事実上、そこでの商品価格を、

$$\text{商品価格} = (1 + \text{利潤率}) \times (\text{商品 1 単位当たり生産費})$$

といった形で捉えるとともに、スミスはそこでは普通労働の貨幣賃金を、またその一代理物として穀物価格を、価値（交換価値・相対価値、相対価格）の標準とすることによって、一商品の労働支配力価値の変化、また一商品の穀物支配力価値の変化を、その商品の生産に要する労働（投入量）および他の諸投入物（投入量）の変化（生産方法の変化・技術変化・生産条件の変化・生産の困難性の変化）の一つのおおよその指標としようとした、とみたわけであるが、スミスの議論においてうえのような標準がうえのような機能を果たしうるその論理ということに関するオドーネルの議論そのものは、結局のところつぎのような形で把握することもできるであろう。

すなわち、いま穀物価格についてみると、

$$\text{穀物価格} = (1 + \text{利潤率}) \times (\text{穀物 1 単位当たり生産費})$$

で、事実上利潤率が所与とされ、また、事実上、例えば穀物生産においては労働のための貨幣費用の減少は家畜のための貨幣費用の増加によってほぼ相殺されるといったような意味で穀物1単位当たり（貨幣）生産費は（ほぼ）不変（穀物生産費（ほぼ）不変）ということが仮定されている、という脈絡において、穀物価格は経時的に（ほぼ）不変となり、またそこでは、銀の側での事情変化、例えば銀1単位当たり（貨幣）生産費に増・減があつて銀価格に騰・落が生じたといったような場合には、穀物支配力タームでの銀の価値（相対価値・相対価格、（銀価格）／（穀物価格））は上昇・下落する、またそのような意味、そのような経路において、銀支配力タームでの穀物の価値（穀物価格、つまり穀物の貨幣価格）は低下・上昇しうる、ということになる。また、穀物の労働支配力については、

$$\frac{\text{穀物価格}}{\text{貨幣賃金}} = \frac{(1 + \text{利潤率}) \times (\text{穀物1単位当たり生産費})}{\text{貨幣賃金}}$$

ということになり、そして、事実上貨幣賃金（賃金率）と利潤率とが所与とされ、また上のような意味で穀物1単位当たり（貨幣）生産費（ほぼ）不変が仮定されているがゆえに、貨幣賃金に対する穀物1単位当たり（貨幣）生産費の比の大きさ（ほぼ）一定のもと、穀物の労働支配力（ほぼ）不変、ということにもなり、そしていま、普通労働の貨幣賃金あるいはまた穀物価格を標準としてある所与の商品Aの価値（相対価値・相対価格）を表示するとすれば——つまり、（商品Aの価格）／（貨幣賃金）、あるいはまた、（商品Aの価格）／（穀物価格）——、そこには、

$$\begin{aligned} \frac{\text{商品Aの価格}}{\text{貨幣賃金}} &= \frac{(1 + \text{利潤率}) \times (\text{商品A1単位当たり生産費})}{\text{貨幣賃金}} \\ &= \frac{\text{商品Aの価格}}{\text{穀物価格}} \times \frac{1}{\text{穀物賃金}} \\ &= \frac{(1 + \text{利潤率}) \times (\text{商品A1単位当たり生産費})}{(1 + \text{利潤率}) \times (\text{穀物1単位当たり生産費})} \times \frac{1}{\text{穀物賃金}} \end{aligned}$$

という関係が成立することになる。そして、自らの尺度を使用して価格変化についての研究へアプローチするさい一般に賃金率（貨幣賃金）と利潤率とを所与としてしているということが基本的特徴となっているスミスの議論において、穀物賃金不変が仮定されるとともに、前でみたような意味での穀物生産費（穀物1単位当たり（貨幣）生産費）（ほぼ）不変が仮定されているがゆえに、例えば、労働支配力ターム

での商品Aの価値（相対価値・相対価格，貨幣賃金に対する商品Aの価格の比の大きさ）が経時的に2倍になった場合には，穀物支配力タームでの商品Aの価値（相対価値・相対価格，穀物価格に対する商品Aの価格の比の大きさ）も（ほぼ）2倍になっており，そして前者の変化は，貨幣賃金に対する商品A 1単位当たり（貨幣）生産費の比の大きさが2倍になっていることを，しかも，経時的に所与のものとしての貨幣賃金との比較で相対的に商品A 1単位当たり（貨幣）生産費が経時的に2倍に増加していることを反映し，また後者の変化は，穀物1単位当たり（貨幣）生産費に対する商品A 1単位当たり（貨幣）生産費の比の大きさが（ほぼ）2倍になっていることを，しかも前でみたような意味で経時的に（ほぼ）不変なものとしての穀物1単位当たり（貨幣）生産費との比較で相対的に商品A 1単位当たり（貨幣）生産費が経時的に（ほぼ）2倍に増加していることを反映することになる。そしてその意味で，そこでは，労働時間の量によって表現されるものとしての価値（相対価値・相対価格）と生活資料（「穀物」）の量によって表現されるものとしての価値（相対価値・相対価格）とがほぼ同意義のものとなり，それらの価値の変化は，生産の困難性の変化・生産条件の変化・技術変化・生産方法の変化等を反映している，ということになる（また以上でみてきたような脈絡で，穀物賃金不変および穀物生産費（ほぼ）不変という二つの仮定は，穀物価格を価値の一標準として，労働の価格の代理物として，使用することを可能にするうえで重要な役割を果たし，またそれをつうじて労働尺度の使用そのものにたいする一つの支えを提供することにもなっているのである）。さらにまた，（少なくとも穀物は別として）実際には特定商品の生産に要する労働投入量と他の物投入量との比例的減少（あるいは増加）といったことを念頭に置いているところでしばしば，その商品の生産に要する労働の量の減少（あるいは増加）という形で言及するスミスの議論では（当該商品1単位当たり労働投入量と他の投入物投入量との比例的増・減），賃金率（貨幣賃金）が所与であるだけでなく他の投入物の価格も経時的に一定である限りにおいては，労働支配力タームおよび穀物支配力タームでの当該商品の価値の経時的騰・落は，それと比例した（あるいはほぼ比例した）当該商品の生産に要する労働投入量（「体化された労働」の量）の経時的増・減および他の投入物投入量の経時的増・減を反映することにもなるのである，というわけである（ただし，オドーネルによれば，前資本主義的交換および資本主義的交換の双方でのスミスの価値尺度に見出される最も重要な属性は「支配される労働」と「体化された労働」との比例性ということであったのであり，そしてスミスは資本主義的交換についての議論においては，そこでの価値尺度としての「生きた労働に対する支配力」という意味での「支配さ

れる労働」と、「体化された労働」との結びつきという形で、「支配される労働」と「体化された労働」との結びつきを確定しようとした、とされつつも、厳密に言えばそこでのスミスの議論は、価値の変化についての体化労働尺度と支配労働尺度との比例性、一財貨の体化労働価値と支配労働価値との一致した動きそのものを示す論理を提供しうるものではなかった、ともされていたのであった。(なお、シロスーラビーニの場合には、スミスは「全価格は、……直接にかまたは究極的に、地代、労働および利潤という……三つの部分に分かれる」とするのであるから、ここでは、ある所与の商品の価格は、産出1単位当たりのすべての収入の合計とみなされうる、とされ、そして、単位として普通労働の賃金率を使用して「支配労働」によって商品価値(相対価格)の大きさを表示しようとするスミスの議論では事実上、二つの時点間で賃金率に変化があるときにさえその二つの時点での当該商品に体化された労働の量(ただし、当該商品に直接的あるいは間接的に体化された労働の量)の間の比率は、その二つの時点で当該商品によって支配される労働の量の間の比率に等しくなるという意味で、「支配労働」標準で測定された商品価値の経時的変化は、当該商品に体化された労働量の経時的変化を反映することができ、その意味で「支配労働」標準は、当該商品の生産における「技術変化」の存否およびその程度を反映した形で「価値」(相対価格)の大きさを表示する価値標準となっているのであり、そしてそれを可能にしているのは、商品価格のうち賃金分け前の占める割合が経時的に安定的ということであった——スミスはこのことを明示的な形で仮定していたわけではないが、そのこと自体は、一国の発展の「前進的」状態において生じることに関するスミスの見解と両立するものであり、さらに、そのことは、例えば第二次世界大戦に先立つ100年といった近代における賃金シェアの相対的安定性ということの説明を意図した多数の文献ということを考えれば、実際にも、それほど無理なものとは思えない——、とみられていたのであった。そしてまた、そのシロスーラビーニの場合には、スミスは、労働の価格が多少とも正確に分かることはほとんどありえないのにたいし穀物の価格は一般により良く知られているという実際的な理由から、労働の価格の代わりに穀物の価格を使用した、「穀物標準」を支配労働という「労働標準」の代用物として、また代用物としてのみ使用したのであり、またスミスの議論では穀物は「労働者の生活資料の主要部分」を代表することになっていたのであるが、事実上穀物価格のうち賃金分け前の占める割合が経時的に安定的という枠組みのなかで議論を展開しているものと捉えることのできるスミスをして、うえのような機能を果たす標準尺度として労働の価格の代わりに穀物の価格を使用することを可能にしている理由そのものは、穀物の単位数量当

たり直接的あるいは間接的に投入される労働の量（この意味での「体化労働」）が経時的に（ほぼ）一定（その意味で、穀物生産における（ほぼ）費用不変）という仮定であった、とみられてもいたのであった。）

(12)：価値尺度についての議論におけるスミスの主要関心事は、生産方法の変化によってもたらされる諸商品の価値（交換価値・相対価値としての価値、相対価格）の変化ということであったのであり、そしてそこでのスミスの意図は、生産方法の変化・技術変化の一結果としての諸商品の変化する価値ということの研究するための尺度を見つけ出すということであった、とみるオドーネルは事実上、資本主義経済に関するスミスの議論では、普通労働の貨幣賃金あるいはその一代理物として穀物価格を標準として使用することによって商品価値を労働支配力あるいはまた穀物支配力のタームで表示すれば、その価値の経時的変化は、うえのような論理から、当該商品の生産方法の変化・技術変化・生産条件の変化・生産の困難性の変化の指標を提供することとなっていた、とみていたわけであるが、オドーネルによればまた、スミスは、そのような機能を果たすものとしての彼の労働支配力尺度および穀物尺度を、銀の価値（交換価値・相対価値としての価値、相対価格）の実際の推移を確定しようとする『国富論』第1篇第11章の「過去4世紀間における銀の価値の変動に関する余論」において利用した、とみられたのであった。

(13)：またその際オドーネルによれば事実上、労働支配力尺度および穀物尺度をうえのような機能を果たすものとして構想、使用していたスミスには、様々な商品の諸生産方法の漸進的変化およびその結果としてのそれら諸商品の価値（相対価値・相対価格）の漸進的変化といったことに関する理論があったのであり、その理論においては、①労働支配力タームでその大きさが表示された穀物の価値（相対価値・相対価格）は経時的にほぼ一定となり（労働支配力の代理物としての穀物支配力）、②野菜・菜園生産物の価値（労働支配力・穀物支配力のタームでその大きさが表示された野菜・菜園生産物の相対価値・相対価格）は、技術改良の結果、低下することとなり、③家畜類（畜牛、家禽、酪農生産物、珍しい鳥、等々）の価値（労働支配力・穀物支配力のタームでその大きさが表示された家畜類の相対価値・相対価格）は、利潤目的で生産するに値するようになるほどにまで上昇することとなり、④金銀およびその他の貴金属の場合には、他の諸商品の場合と違って、ある特定の時期に商業世界にそれらの金属を供給しうる鉱山が豊かであるか貧しいか（それらの金属の生産条件）は、特定の国の産業の状態とはなんの関係もないがゆえに、それらの金属の価値（労働支配力・穀物支配力のタームでその大きさが表示されたそれらの金属の相対価値・相対価格）は、「改良の進展」と相関する明確な

趨勢をもたない、ということとなり、⑤製造品の価値（労働支配力・穀物支配力のタームでその大きさが表示された製造品の相対価値・相対価格）は、生産方法の改良の結果、かなり低下することとなる、とみられていたのであった。オドーネルは、「余論」でのスミスの見解では銀の価値（相対価値、相対価格）の推移は事実上一貫性のないまちまちのものであったということになるのであるが、社会システムの生産的潜在能力の発展についてのア・プリアリな理論またそれをもとにした様々な相対価格（相対価値としての価値）の漸進的変化についてのア・プリアリな理論をもっていたスミスによる「余論」での議論そのものは、そのような意味合いをもつものとしての、諸商品の諸生産方法の漸進的変化およびその結果としてのそれら諸商品の価値（相対価値・相対価格）の漸進的変化についての上でみた理論に基づきつつ、彼の価値尺度を利用しながら展開されていた、とみたのであった。

(14)：そしてオドーネルによれば事実上、価値（相対価値、相対価格）の真の尺度として労働支配力・穀物支配力を使用するとともに諸商品の諸生産方法の漸進的変化およびその結果としてのそれら諸商品の価値（相対価値、相対価格）の漸進的変化といったことに関するうえの理論に基づきつつ「余論」での議論を展開するスミスは、銀の価値の実際の推移を論じる過程で、例えば、「ジュリアス・シーザーの侵入からアメリカにおける鉱山の発見にいたるまで、銀の価値は継続的に低落していた」（それとの対応で、その期間に、家畜や家禽等々の貨幣価格が継続的に上昇していた）といった見解について、往古の時代に家畜や家禽等々の貨幣価格（銀・貨幣支配力のタームで表示された家畜や家禽等々の価格）が非常に低かったのは、銀の価値（労働支配力・穀物支配力のタームで表示された銀・貨幣の相対価値・相対価格）が高かったからではなくて、家畜や家禽等々の価値（労働支配力・穀物支配力のタームでその大きさが表示された家畜や家禽等々の相対価値・相対価格）が低かったからであるとして、うえのような見解に異議を唱え、また、彼の時代における銀の価値の動向に関して流布していた見解に対して異議を唱えて、銀の価値は上昇しつつあると主張し、そして、穀物の貨幣価格（銀・貨幣支配力のタームでの穀物の価格、つまり前で言及されてきた「穀物価格」）における観察された低下はすべて、（銀の側での事情変化による）銀（貨幣）価値の上昇（労働支配力・穀物支配力のタームでその大きさが表示された銀・貨幣の相対価値・相対価格の上昇）といった経路から生じたものであって、穀物輸出奨励金（それによる耕作の奨励をつうじての穀物生産における事情変化）といったような経路から生じたわけではない、とした、とみられていたのであった。また、うえのような価値尺度を使用するとともにうえのような理論に基づきつつ展開される「余論」でのスミスの

議論においては、ある特定の時期に商業世界に金銀を供給しうる鉱山が豊かであるか貧しいか（金銀の生産条件）は特定の国の産業の状態とはなんの関係もないゆえに銀（貨幣）の価値は「改良の進展」と相関する明確な趨勢をもたないということになっていたのであって、そのような見方をとるスミスは、一国における銀の高価値がその国の貧困・野蛮を指し示す——スミスは、「こういう考えは、国民の富とは金銀の豊富さにあり、国民の貧困はこれらの不足にあると主張する政治経済学の体系と関係がある」とする——といったように事実上銀価値を一経済の発展段階の一指標としようとする考えを退け、それに対し、同じくうえの理論中で扱われたような諸商品のうち、銀とは別の、その理論中で言及されたような傾向をもつ諸商品の諸価値の動きが、経済発展の指標を提供することになる、という考えを提示した、ともみられていたのであった。さらにまた、スミスの経済発展理論そのものは分業と資本蓄積に基づくものであってそこでは金銀の、量ならびに価値といったものは取るに足らない役割しか演じていないとみるオドーネルによれば、スミスは、この「余論」で労働支配力尺度・穀物支配力尺度を利用しつつ、そのようなものとしての彼の発展理論を弁護しようとしていたのであり、そのような脈絡でスミスは、彼の発展理論が様々な生産方法の発展（およびそれに付随する諸商品の諸価値の諸変化）を説明しうることを示そうとするとともに、銀の、量ならびに価値そのものは、彼の発展理論中に含まれる持続的諸力によって発展パターンが決定された後の、一つの残余的要素であることを示そうとしていたのである、とも捉えられていたのであった。

(15)：なお、オドーネルは、一方で、シロスーラビーニに似た面も示しつつ、「短期」と「長期」との間だけでなく「長期」と「発展段階」（もしくは「状態」）との間にも区別をなすスミスの議論においては、一「発展段階」内においては生産方法は変化しうるが、賃金、利潤、地代（の率）が変化するのは「発展段階」の移行に際してのみ、ということになっている、と捉え、また、スミスの議論においては穀物賃金に変化するの「発展段階」の移行に際してのみということになっている、ともみるといったように、スミスの議論における賃金、利潤、地代（の率）の変化、穀物賃金の変化の可能性を一応は認めつつも、スミスの労働支配力尺度、穀物尺度を論じる際には、そこでのスミスの議論における穀物賃金不変の仮定を指摘するとともに、スミスが彼の尺度を使用して価格変化についての研究へアプローチする際の基本的特徴は一般に賃金率（事実上、貨幣賃金）と利潤率とが所与とされているということであったという認識に立ちつつスミスの議論を取り扱い、そして、スミスの議論における経済発展の指標といったことを取り扱う際にも、事実上、そ

ここでスミスが利用している労働支配力尺度、穀物尺度そのものはいわゆるような假定、認識のもとでのものとして把握していたことになるわけであるが、スミスの議論における、労働支配力尺度・穀物支配力尺度を利用しての経済発展の指標といったことについてのオドーネルの見方そのものは、つぎのようなものとして把握することのできるものであった。

すなわち、各々の商品の生産方法の変化（生産条件の変化、技術変化）による各々の商品の価値（交換価値・相対価値、相対価格）の変化を確定しうる形で各々の商品の価値を表示しうる尺度として労働支配力尺度さらに穀物尺度を構想・使用するスミスにはまた、様々な商品の諸生産方法の漸進的变化およびその結果としてのそれら諸商品の価値の漸進的变化といったことに関する「理論」があったのであり、そしてその理論によれば、労働支配力タームでその大きさが表示された穀物の価値（労働支配力で測られた相対価格としての穀物の真実価格）は経時的にはほぼ一定（労働支配力の代理物としての穀物支配力）、野菜・菜園生産物のそれは、技術改良の結果、低下の傾向をもち、家畜類のそれは上昇傾向をもち、製造品のそれは、生産方法の改良の結果、かなり低下する傾向をもつ、ということになるのであったが、スミスはそのような関係から、一経済における上のような諸商品の、労働支配力ターム（あるいはまた穀物支配力ターム）でその大きさが示された相対価格としての真実価格の推移・労働支配力ターム（あるいはまた穀物支配力ターム）でその大きさが示された相対価値としての価値の推移を、その経済の発展という脈絡のなかで捉えようとした。つまり、労働支配力タームでその大きさが示された穀物の真実価格・穀物の価値は、すべての経済発展水準をつうじて（ほぼ）一定であるのにたいし、家畜類のそれは、経済発展の進行につれて上昇、野菜・菜園生産物のそれは低下、製造品のそれはかなり低下、という傾向をもつのであって、家畜類の上昇、野菜・菜園生産物や製造品のその低下は、経済発展の進行を指し示すものであり、また、ある所与の時点、ある所与の国において、（ほぼ）一定の穀物の真実価格・価値に対して家畜類の真実価格・価値、野菜・菜園生産物の真実価格・価値や製造品の真実価格・価値がそれぞれどれほどのものであるか、ということ、あるいはまた、労働支配力が（ほぼ）不変である穀物のタームでの、家畜類の真実価格・価値がどれほど高くなっているか、同時に、穀物タームでの、野菜・菜園生産物の真実価格・価値や製造品の真実価格・価値がどれほど低くなっているか、ということが、その国の到達している経済発展水準を指し示す、と考えようとした、というわけであった。（なお、ブレイドゥンは、スミスが「それを獲得するための労苦と骨折り」として定義する事物の「真実価格」とは事実上、生産性と表裏の関

係にあるもの——そして、概念的には、交換価値としての価値とは別のもの——であったのであって、スミスは事物のその「真実価格」の経時的変化の測定ということによって事実上、当該事物の生産における生産性の経時的変化の測定といったことを考えようとしていたのであり、『国富論』第1篇第5章でスミスが「労働に対する支配力」指標等を論じた際の主要関心事はそのようなものとしての生産性の経時的変化の測定、そのための指標等ということであった、とみていたわけであるが、そのブレイドゥンはまた、スミスはその第1篇第5章で展開した「真実価格」についての議論を第1篇第11章で使用したのであり、第11章の「余論」では例えば、穀物タームでの銀の価格における諸変化が銀の「真実価格」における諸変化を測定すると考えられていた、とするとともに、異なる諸商品の間での真実価格の諸変化における相違そのものは、それらの諸商品の、諸交換価値の階層関係における位置の諸変化を引き起こすであろうゆえ、その「余論」での銀あるいは家畜の真実価格についてのスミスの議論は事実上、そのような意味でなぜある諸価値（ある諸交換価値・諸相対価値）が変化してきたのかという変化する諸価値についての一研究を構成することとなっている、ともみていたのであった。また、スミスの議論では、賃金率が経時的に変化する場合にも「支配労働」標準またその代用物としての「穀物」標準は、それらの標準によって表示された商品の価値（相対価格）に経時的な変化があったときその変化が当該商品の生産における経時的な「技術変化」、「生産条件の変化」を反映するといった機能を果たすものとして構想されていたとみつつ、そこでのスミスの論理についてオドーネルとは違った見方を示していたシロスーラビーニは、『国富論』第1篇第11章中で穀物標準は、銀の相対的稀少あるいは豊富といったことに起因する諸価格の動きを、生産条件の変化ということに起因する諸価格の動きから区別するために使用されており、またそこでは（一国経済の）「改良の前進」は一定の諸商品の、労働もしくは穀物のタームでの価格を上昇させるとともに他の諸商品の、労働もしくは穀物のタームでの価格を低下させ、それゆえまた異なった種類の諸商品のうえのようなタームでの価格の動きは一国の到達した発展段階の一つの目安とみなしうるということになっていた、といった見方を示していたのであった。そしてまたシロスーラビーニによれば、生産条件の変化に起因する価格変化と、銀の相対的稀少あるいは豊富ということに起因する価格変化とを区別するために穀物標準が使用されている第11章の「余論」の主要目的の一つは、ヨーロッパにおける金銀の量の増大がなんらかの道筋で経済成長を促進したという重商主義的見解を根絶することにあつたのだ、とみられてもいたのであった。）

(注)

(78) なお、M. ブラウグは、我々が前三稿で扱ってきた議論を含むオドーネルの著書についての書評 Mark Blaug, review of *Adam Smith's Theory of Value and Distribution: A Reappraisal*, by Rory O'Donnell, in *History of Economic Thought Newsletter*, no. 46 (Spring 1991), pp. 11-13 で、その著書に対する辛口の批評をくわえつつも、その著書中のあちこちには新鮮な見地が提起されており、そこには「例えば、スミスの有名な支配労働価値尺度 (labour-commanded measure of value) についての素晴らしい議論が存在する」とし、オドーネルのその議論を、つぎのようなものとして紹介している。すなわち、オドーネルは、スミスのそこでの主要関心事を、技術の諸変化によって引き起こされる諸相対価格の諸変化を測定し、説明することであった、とみる。そしてオドーネルのみるところによれば、スミスは、すべての諸商品のうち穀物のみが費用不変のもとで生産され、また、労働の穀物賃金 (corn wage of labour) は経時的に、相対的に不変的であると考えられるがゆえに穀物の価格は事実上不変の価値標準 (invariable standard of value) を提供する、ということをも主張したのであり、そしてこのことは、スミスが一商品の労働価格 (labour price of a commodity) における諸変化を、その商品の生産に要する投入 (input) における諸変化の指標 (indicator) として使用できる、ということの意味した。他の注釈者たちの標準的見解は、スミスは諸価格および諸名目所得双方の厚生上の意味合い (welfare significance) を示すことを欲したがゆえに諸名目価格を、一般物価指数によってよりもむしろ労働の価格でデフレートすることを意識的に選んだのだ、というものであるが、オドーネルはそのような立場に対する有効な攻撃を仕掛けるのである、というわけである。

なお、オドーネルのこの著書については、日本では、関源太郎による「文献紹介」(『経済学史学会年報』第29号, 1991年10月, 39頁)があり、また、例えば星野彰男「アダム・スミス研究の現状と将来」(『経済学史学会年報』第39号, 2001年5月, 28-34頁中)でも、言及がなされている。

(79) なお、オドーネルは、価値の標準としてスミスは普通労働の貨幣賃金を採択したとするのであるが、シロスーラビーニも、スミスは適切な単位として支配される労働 (labour commanded) を採択した、すなわち、スミスは単位として普通労働の賃金率を用いようとした、としていた (Sylos-Labini [1976], p. 206, 中川 [1995], (下), 576頁, 612頁を見よ)。これらとともに、価値尺度に関するスミスの議論における「異質労働の問題」へのスミスの対処ということについての、各々の見方を示しているものといえる。